

川上宏奨学基金受給研究報告書

題目 合奏するひとびとの相互作用分析—アマチュア室内楽団の実践—

1. 目的

本論文では、合奏を協働のひとつの形としてとらえる。合奏するひとびとが「どのようにしてアンサンブルを実現しようするか」を彼らの練習の場を観察し、その実践を相互作用として捉えて分析、考察する。それを通じて、協働するとはどのようなことか、その実相の一端を描き出すことを目的とする。

2. 調査の方法

2014年5月から2015年3月までの11か月間、アマチュア室内楽団の練習の観察を行った。オーディオ機器による録画録音については許可を得られなかったため、観察は、その場で適宜メモを取り、それをまとめるという手順で行った。1回3時間で月2回行われる通常練習を中心に20数回の練習を観察した。フィールドワーク期間終了後、指導者2名、メンバー8名に対し、それぞれグループでの半構造化インタビューを実施した。

3. 合奏という協働の特徴

「目的」に述べたように、合奏を協働のひとつの形として捉えるという立場で練習場面の観察に臨んだ。それは協働のある達成形としての「アンサンブルの実現」の過程を観察することであった。観察のポイントは「どのようにして」を観ることである。ただし、合奏という協働は、たとえば、4x100mリレーのような形の協働ではない。つまり、ひとりが為したことを、次が引き継いで、その為すべきことを為す、という形ではない。あるひとつの成果物を得るために、何人かでひとつことに寄ってたかって取り掛かる、という複合的で煩雑な面を持っている。そのため演奏者たちは互いに影響を及ぼし合う関係にあって常に調整し合う必要がある。しかも、演奏中には言葉によるやり取りはできない。

4. 相互作用分析

合奏するひとびとの相互作用について、いくつかの側面に焦点を当てて分析した。

- ① パート譜で演奏するとはどのようなことか。
- ② 出だしのタイミングとテンポはどう表示されるのか。
- ③ Schutz の指摘する「リーダーになったり、フォロワーになったりする準備がいつもできている」とはどういう意味か。
- ④ Weeks が「聴く、が synchrony の不可欠な基本」と述べる「聴く」とは何を聴くのか。
- ⑤ Schutz も Weeks も指摘する、音楽において「数える」とはどのような行為か。
- ⑥ 合奏演奏者たちは、演奏中、何を「見る」のか、それによって何を得るのか。
- ⑦ 「合奏で大事なことは決めないこと」とはどういう意味か。
- ⑧ 「アンサンブルの実現」とはどのようなことかを指導者の指導から考える。

5. 考察と結論

Sharrock と Watson (1988) は、「『協働的(collaborative)』、『協調的(co-ordinated)』という表現は、(たとえば)『協働という精神のもとに行われる』あるいは『お互いを助けあうという目的でなされる』という意味で理解されるべきではな」と指摘する。

合奏という協働もまた、互いに「力を合わせる」「補い合う」「心をひとつにする」「支え合う」「助け合う」という寄り添う関係のみでは成り立たない。まず主体性を持って自分の音楽を奏でる。演奏者各々の、こうしたい、こうがいいんだ、というそれぞれの収まらない気持ちが集まって、しかし何とか工夫して収めていくことが重要なのだ。自分の音楽を生かしつつ、ときに相反して拮抗する、絶妙に対応する、などによって全体の兼ね合いを計る、そうした奏者たちの相互作用の只中にアンサンブルの実現はあると思われる。

6. 今後の課題

音は振動として発せられたのちに、耳が受信し、脳の聴覚野で音として作り直される。音は常に事後であり、聴いてはじめて「音」となるのだ。演奏者は演奏した後、自分の音を聴いて実感し、次の音を奏でることになる。さらに、合奏では共演者の音や共演者との音のハーモニーを聴くことが、次の演奏につながる。音楽そのものが演奏者に次を求めてくるのだ。

本研究では、共演者間の相互作用を分析してきたが、演奏者たちと彼らが生み出した音楽との間にも相互作用が行われていると思われる。それについて、更なる分析・考察が今後の課題として残された。

7. 文献リスト

- Schutz, Alfred, 1964, “Making Music Together, A Study in Social Relationship”, *Collected Papers II Studies in Social Theory* (=1991, 渡部光・那須壽・西原和久訳「音楽の共同創造過程——社会関係の一研究」『アルフレッド・シュッツ著作集 第3巻 社会理論の研究』マルジュ社, 221-244.)
- Sharrock, W. and Watson, R., 1988, “Autonomy among social theories”, Fielding, N. G., ed., 1988, *Actions and Structure-Research Methods and Social Theory*, London: SAGE Publications, 54-77.
- Weeks, Peter, 1996, “Synchrony Lost, Synchrony Regained: The Achievement of Musical Co-Ordination”, *Human Studies* 19: 199-228.

本研究に対し、川上宏奨学基金よりご支援を賜りました。故川上宏先生ならびにご遺族の皆さまに深く感謝申し上げます。

会計報告

奨学金は以下のように使わせていただきましたことを、ここにご報告いたします。

接待交際費： 調査対象団体定期演奏会時の楽屋見舞

消耗品費： MacBook 購入